様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月　１ 日現在

機関番号：１２６０１
研究種目：若手研究
研究期間：2020～2022
課題番号：２０Ｋ１３５４３

研究課題名（和文）明治中後期～大正期の農村地域における企業と労働者

研究課題名（英文）The study of factories and manual labourers in rural area from Meiji to Taisho era

研究代表者
中西　啓太（NAKANISHI, Keita）

東京大学・文書館・准教授

研究者番号：３０７５５４８４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、明治中期～大正期の農村地域に所在した工場・企業は、労働力をめぐって周辺の地域社会とどのような関係を取り結び、人々はどのように働いていたのかを、当該期には例外的に男性肉体労働者を多く雇用した煉瓦製造業を事例として検討した。
第一に、地域社会の既存の労働集団と工場との関係やその変化を捉え、工場の設置という近代資本主義経済社会がもたらした変化を考察した。第二に、地域へ流入してくる者も含めたさまざまな労働者の様相を捉え、賃金水準や勤続期間などを比較しつつ労働史に貴重な事例を提示した。よって、先行研究に対して労働の観点を持ち込み、実態が分かっていなかった労働者の事例を明らかにできた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究の成果は、長らくブレイクスルーと言えるような発展的研究が登場していなかった研究潮流に対し、新しい視点や発見を持ち込んだという学術的意義を有する。
また、近代以降の日本の歩みは、人々の「生」にかかわって雇用労働が占める比率が高まっていく過程と捉えることもできる。そうした視点に立った時、従来の研究では実態が分かっていなかったが、雇用労働者の一大勢力であったと考えられる男性肉体労働者の一側面を提示することができた。これは、前近代社会からの転換を含め、現代とは異なる働き方・生き方の理解を深め、省みる材料を提供する点で社会的意義を有する。地域の博物館での講演という形での社会的還元も予定されている。

研究成果の概要（英文）：This study analyzed how factories in rural area of the middle Meiji to Taisho made relationship to surrounding local society to employ labourers and how they worked in the factory. The case is brickmaking factory because it employed large number of male manual labourers exceptionally in this era. Important results of this study is following; first, this study made clear about the relationship between factory and existing labourer group in local society and the change of it. It was imortant change by locating a factory, which was one of the cases that capitalism changed local society. Second, this study provided a valuable example of various labourers which included coming from other region and compared about wages or employed term with the results of previous studies. From the above, this study added new perspective to previous researches, and made clear about some labourers, especially male manual labourers in Meiji to Taisho era which have not been known about their reality.

研究分野：日本史

キーワード：日本史　経済史　日本近現代史　労働史　地方史

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

本研究が学術的背景としていたのは、明治期日本の「地方」における広範な経済発展や企業勃興を捉えた研究潮流である。これらの研究は、大略以下のような構図を示してきた。

明治期における日本の資本主義的な経済発展は、大都市部に集中して起こったのではなく地方分散的に進んだ。その要因を考察するために、先行研究では社会的な資金の集中という局面に注目し、たとえば、明治前中期には資本市場がいまだ未熟であったが、地域社会における密接な人間関係（「顔のみえる関係」）がこの限界性を補完し、匿名的な人間関係に特徴づけられる都市部に対する比較優位を有したという指摘がなされている（中村 2010）。また、リスクをいとわずに地域内の企業活動へ投資する有力者層の役割も指摘され（「動機としての地域社会」：谷本 1998）、「地方」の経済的意義が明らかにされてきた。

ここで「地方」とは、単なる非都市部・非中央という意味合いではなく、濃密な人間関係や面接性などの特徴が、経済的に何等かの機能を果たしうる地域的なまとまり、という視角に基づいて用いられている点が重要である。そのため、本研究では「地方」と表記している。

しかし、上記の研究成果では、分析対象とする局面が資金調達における「地方」の経済的意義に集中する傾向があり、労働者の募集や管理、原料調達など、経済活動に必要なその他の要素への分析は十分になされてこなかった。また、関心の集中の結果として、企業の設立時にクリアすべき課題に分析が留まる傾向があり、企業が経営を継続していく局面・時期での地域社会とのかかわりはあまり分析されていない。そのため、取り上げる時期も日露戦争前後までに限定されがちで、より後の時期の「地方」はあまり分析されていない。

これを受けて本研究では、前記の研究が残した成果と課題に対し、労働という角度から新たな視点を提起することとした。

具体的には、当該期では例外的に男性を中心とする単純肉体労働者を多く雇用した煉瓦製造業を事例として取り上げることで、労働市場の未成熟や周辺農村との労働力需要の競合といった問題点が想定される中で、いかにして労働者を集めて操業を続けたのか、という問いを念頭に置くことで、独自の視点から背景となる学術成果を発展させることを試みた。

２．研究の目的

本研究の目的は、明治期日本の経済発展における「地方」の役割に注目した研究潮流を背景としつつ、明治中期～大正期の農村地域に所在した工場・企業は、生産要素の一つである労働力調達にあたり、周辺の地域社会とどのような関係を取り結び、人々はどのように働いていたかを捉え、明治期の経済発展における「地方」の役割に注目してきた研究誌に対し、労働という角度から新たな視点を提起することである。

具体例としては、当該期には例外的に男性肉体労働者を多く雇用した煉瓦製造業の工場を取り上げた。労働史の先行研究において、近代日本の経済が発展していく明治・大正期について主として取り上げられてきたのは、工業分野として最も早く成長し、大量の女性労働者を雇用した紡績業・製糸業、都市部において、やや熟練を持つ男性労働者を中心に雇用した機械工業、都市部において、単純肉体労働に従事する日雇い労働者、鉱山という特殊な環境で、単純肉体労働に従事する男性労働者や家族を雇用した鉱業をあげることができる。本研究では、産業上の特性から必要とする労働者のタイプや工場の拠点性において異なる特徴を有する煉瓦製造業を取り上げ、さらに、匿名的な人間関係が特徴な大都市でも、極端に閉鎖的な環境である鉱山でもなく、前近代からの共同性を有する農村社会との間でどのようなかかわりが持たれたのか、という点も視野に入れることで、本研究の学術的背景となる先行研究の視点を受け継ぎ、発展させることを目的とした。また、鉱山・都市部の状況と、本研究の具体例が所在した農村地域の状況とを賃労働や雇用、企業と人々の関係という面から関連付けて捉える創造的な視座を拓くことにつなげることを目的とした。

３．研究の方法

埼玉県立文書館などが所蔵する企業や地域有力者、公的機関などが遺した一次史料を分析し、実証的な考察で前記の課題にアプローチする。主要な史料である埼玉県立文書館所蔵『日本煉瓦製造株式会社文書』は研究開始時点でかなりの量を撮影しており、新たに参照する一次史料を含め、史料所蔵機関へ赴いて史料調査を行うことで分析の材料を収集する。

また、関連領域が多岐にわたるため、文献を収集し、先行研究の知見に幅広く触れることで、本研究の成果を関連付け、新しい視座を構築することを目指す。

４．研究成果

本研究の成果として、大きく二つの方向性をあげることができる。

第一に、工場設置以前から地域に存在していた労働集団と工場との関係やその変化を捉えることができ、工場の設置という近代資本主義経済社会がもたらした変化を、具体的な事例に即して労働という角度から考察したこと。第二に、地域へ流入してくる者も含めたさまざまな労働者の様相を捉え、賃金水準や勤続期間などを比較しつつ労働史に貴重な事例を提示したことである。

これらの成果により、「地方」の経済発展における役割に注目した研究潮流へ、労働の観点を持ち込むことができ、長いスパンでの変化も提示することができた。また、広く近代日本の雇用労働の理解に目を向けたとき、十分に実態が分かっていなかった部分について詳細な事例を示すことができた。

第一の成果は、具体的には以下の二つの論文として公表されている。

(1)明治中期～大正期における工場と河川水運・船頭集団

埼玉県立文書館所蔵『日本煉瓦製造株式会社文書』に収録されている、金町製瓦株式会社の残した一次史料を活用し、金町製瓦が主として東京市内を中心とする受注先へ製品煉瓦を出荷する際に川舟で江戸川を下る運送を請け負った、史料上「船組合」や「船仲間」などと記述される船頭集団と工場との関係を分析した。

船頭たちは、近世に金町の対岸である松戸の河岸に集まった人々との連続性は明らかにできないが、明治中期における江戸川沿岸への金町製瓦工場設置以前から江戸川舟運に関わっていた人々だと考えられる。工場設置直後の初発の時期においては、こうした既存の労働集団への請負に依拠するよりなく、他方で彼らに依拠することでスムーズに経済活動を展開することができたと考えられる。

船頭集団側と工場側とのやり取りを示す一次史料は限られているが、船頭集団の内部には一定の階層性や自律的な秩序、相互扶助的な関係が存在することがうかがえ、「幹事」と称される親方的存在による取り纏めや船の所有、中間的搾取も見て取れた。

金町製瓦は主たる市場である東京市との近接性により同業他社と比べて運送コストや出荷にかかる時間を抑制することに成功しており、船頭集団による江戸川舟運への依存度は高かった。また、船頭集団の側も、内部の軋轢や経済的問題の発生に際し、企業という巨大な経済主体へ頼る行動を見せており、両者は相互に依存しあう関係性にあった。

しかし、この力関係は次第に金町製瓦側へと傾いていった。金町製瓦は早期から自前の運送船の建造や蒸気船の導入を模索しており、製品出荷における主導権の掌握を試みていた。また、船頭集団に対しても、暴力沙汰をきっかけに船頭たちの世界へ効率的な業務のための規律を持ち込もうと介入を強めていった。

後年になっても実際に乗船していたのはこうした船頭たちであったようだが、金町製瓦が所有する船が使用される形を中心とする出荷工程へと移行していったと考えられた。輸送コストの点でも合理化されたことがうかがえる一方で、船頭たちは在来的な働き方からの変容を迫られ、その生き方を工場との関係に適合的なものとしていかなければ同じ場で働き続けることはできなかったと考えられる。

生産工程に関して、親方的存在に掌握された既存の労働集団に依存する形で操業を始め、次第に直接的な労働管理への移行を試みていく様相が先行研究でもしばしば捉えられている。本研究においてはこれを出荷工程においてより強い形で見出したと言える。また、企業がその初発において既存の労働集団に強く依存することや、逆に既存の労働集団も新たな生計の場として企業へ依存していくこと、企業が合理化を目指す中で両者の関係は変容し、それは労働者の生き方のありようにも変化を迫ることがうかがえ、当該期の日本において様々な地域で発生した事象ではないかと示唆された。

(2)明治中期～大正期における窯業集団の再編と労働・生活

埼玉県立文書館所蔵『日本煉瓦製造株式会社文書』に収録されている、金町製瓦株式会社の残した一次史料を活用し、金町製瓦が工場を設置して操業開始する以前から同地で煉瓦製造に従事し、主として焼成前の煉瓦素地の生産に関わっていた史料上「白地家」や「素地家」などと記述される親方的存在に率いられた窯業集団と工場との関係を分析した。

「白地家」たちは人力での型抜き成形による煉瓦素地の生産を請け負っており、金町製瓦への在来業者の工場敷地や登り窯の売り渡し後も、引き続き「白地家」が率いる「白地製造人」らの労働集団が金町製瓦への煉瓦素地納入を請け負っていた。

しかし、金町製瓦が早期に西洋技術を導入したことで状況が変化する。ドイツで考案され、連続で煉瓦を焼成できるホフマン窯を建造し、これにより要請される大量の煉瓦素地供給に対応するために、蒸気機関を動力としてピアノ線切断により連続の素地成形ができる成形機械を据え付けたのである。これにより、「白地家」たちが有していた人力での素地成形の在来的な熟練は陳腐化してしまい、機械が成形した素地の乾燥や運搬という比較的単純な工程に従事し、素地納入を請け負う形へと労働内容が大きく変容した。

しかし、「白地家」たちの中には離職したと考えられる者もいるが、断片的な史料に留まるものの続けて名前が登場する者も多く見られ、大幅な労働内容の変更にもかかわらず長期にわたって勤続する者も存在していた。

一方で金町製瓦側も、煉瓦素地の品質に関して「白地家」たちに強く介入していく半面、「白地家」たちの労働を自らが直接雇用する労働者へと完全に置き換えようとはしなかった。おそらく、日清戦争期の時点で総勢100名を超える「白地製造人」たちの労働を管理するコストは到底負担できるものではなく、「白地家」たちの統括力や、乾燥工程に関する彼らの何らかの経験知に依拠する面が大きかったのではないかと推測される。

また、「白地家」たちも一部は次第に置き換わっていくが、遠方から入職する者や移動する中で一時的に身を寄せる者も存在しており、金町製瓦が工場敷地内外に住居を提供していることが労働者たちを引き付けたことがうかがえた。この点にかかわって、「白地家」には女性名もみられ、家族労働が展開していたことも示唆され、居住と労働の密接なかかわりが存在したこともうかがえる。

以上の研究成果から本研究の視点を改めて考えると、地域社会が有していた役割の一面として、その地域に存在していた労働集団が企業の初発の時期の生産や出荷を支えた点があげられる。明治期はまだ労働市場も成熟しておらず、企業が活動を始めるに際して、一から労働者を集めて組織する形だけでなく、既存の労働集団に特定の工程を丸ごと依拠し得る点が、すでに一定の生活が営まれていたエリアだからこそ意義として考えられ、労働集団の側としても新たな生計手段として巨大な経済主体である企業に依存していく面もうかがえた。他方で、企業活動が軌道に乗るにつれて、合理化を志向してこうした人々の働き方に介入し、彼らへの依存を乗り越えていくこともうかがえ、この働き方の変容は労働集団の「生」のありようそのものを変容させてしまう強さを有していたと見ることができる。

第二の成果は、学会報告とその場における議論で得た知見を踏まえてまとめなおし、査読付き学術誌に掲載が決定された、以下の論文として公表される予定である。

(3)1880年代末～1920年代初頭の地方工場における単純肉体労働者

埼玉県立文書館所蔵『日本煉瓦製造株式会社文書』に収録されている、金町製瓦株式会社の残した一次史料を活用し、煉瓦製造の工程で中核となる焼成にかかわり、金町製瓦に直接雇用される労働者たちや、しばしば親方的存在に仲介され、周辺的な製造工程にかかわる労働者たちの様相や変化に迫った。単純肉体労働を中心とすることから主として熟練を有さない男性労働者たちであり、研究史上あまり実態が明らかにされてこなかったタイプの労働者であった。

金町製瓦は窯を24時間体制で稼働させる必要性から工場内外で居住機能を整備し、細かい評価付けで直接雇用する労働者を管理していた。しかしこうした生産技術上の意図とは別に、金町製瓦が居住施設を提供したことは労働者を引き付けるうえで一定の意義を有したと考えられる。ある程度遠隔地からも入職している労働者や、移動するなかで一時的に工場へ身を寄せるような人々の事例も見られ、また、金町製瓦が江戸川改修工事に伴って工場を移転させると世帯を挙げてともに移動する労働者も一定数存在し、別の新設工場への勤務先変更にも従っている。

金町製瓦の賃金水準は他業種と比較した時に決して高くはなく、役付になれなければ賃金が頭打ちになっていた。また、地理的にも東京市という豊富な就業機会が存在する場に近接していた。それにもかかわらずかなりの長期にわたって勤務を続ける労働者が存在したのは、何らかの居住機能が提供された点は大きいと考えられる。逆に言えば、「住」を得られるメリットから、やや低い賃金水準を受け容れて長期間勤続を続けていたと捉えることもできる。近代日本の賃金水準の低さという論点については農業からの規定が注目され、この事例でも好況期の1900年前後からは、周辺農家の余剰労働力に該当すると考えられる人々を直接吸引しはじめており、臨時的に通勤する労働者の賃金水準の低さという農業からの影響は考えられるが、それと同時に、離農・離村しているために「住」を求めるがゆえの志向性に規定された面も考慮できるのである。

こうして長期にわたって定着した労働者には、工場という場で企業側の指示に従って熱心に穏やかに働くよう馴致されていった側面も見出された。ただし、このように「住」という生活における重要な点を中心に大きく工場へ依存し、順応していったとしても、関東大震災後の業界全体の沈滞期には整理に遭っており、経営状況に生を左右されざるを得ないのであった。

以上の研究成果を踏まえると、労働者にとっての「住」という要素の重要性がうかがえ、この点は建物が密集する都市部よりも、本研究が事例としたような農村地域の工場の方が特徴として備えやすいことも示唆される。これにより遠隔地からの人の流入が起こり、また長期にわたる勤続者にとっては家族労働の展開などライフコースを歩むうえでの重要な場となっていた。

一方で、労働者の属性は一様でなく、周辺の農家の家計補助と工場側の臨時的・補助的な雇用という点で利害の一致が見られることもうかがえ、これも既存の地域社会に労働の場が生まれたことに起因すると言える。

以上のように、学術的背景とした先行研究に対し、労働という視点を持ち込んだことで新たな視座が開かれた。資本主義経済化の進展と働き方・生き方の変容という視点は、現在のわれわれに対して示唆する点も豊富であり、社会的意義も大きな研究成果だと言える。

◎参考文献

中村尚史『地方からの産業革命』名古屋大学出版会、2010年
谷本雅之「日本における"地域工業化"と投資活動」『社会経済史学』64(1)、1998年

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計3件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　2件）

１．著者名 中西啓太	４．巻 13
２．論文標題 明治中期～大正期における工場と河川水運・船頭集団	５．発行年 2022年
３．雑誌名 愛知県立大学日本文化学部論集	６．最初と最後の頁 157～190
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15088/00004847	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 中西啓太	４．巻 2
２．論文標題 明治中期～大正期における窯業集団の再編と労働・生活－煉瓦製造業者金町製瓦株式会社の工場における事例から－	５．発行年 2023年
３．雑誌名 人文社会論叢	６．最初と最後の頁 1～15
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15088/00005010	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 中西啓太	４．巻 掲載決定
２．論文標題 1880年代末～1920年代初頭の地方工場における単純肉体労働者－煉瓦製造業者・金町製瓦の事例から－	５．発行年 2023年
３．雑誌名 歴史と経済	６．最初と最後の頁 －
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計3件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 中西啓太
２．発表標題 産業革命期における男性不熟練労働者の工場労働・管理の分析
３．学会等名 政治経済学・経済史学会秋季学術大会
４．発表年 2021年

１．発表者名 中西啓太
２．発表標題 明治中期～第一次大戦期の煉瓦工場における男性不熟練労働者
３．学会等名 労働史研究会
４．発表年 2022年

１．発表者名 中西啓太
２．発表標題 明治中期～第一次大戦期の煉瓦工場における男性不熟練労働者－金町製瓦株式会社の事例から－
３．学会等名 社会経済史学会
４．発表年 2022年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関